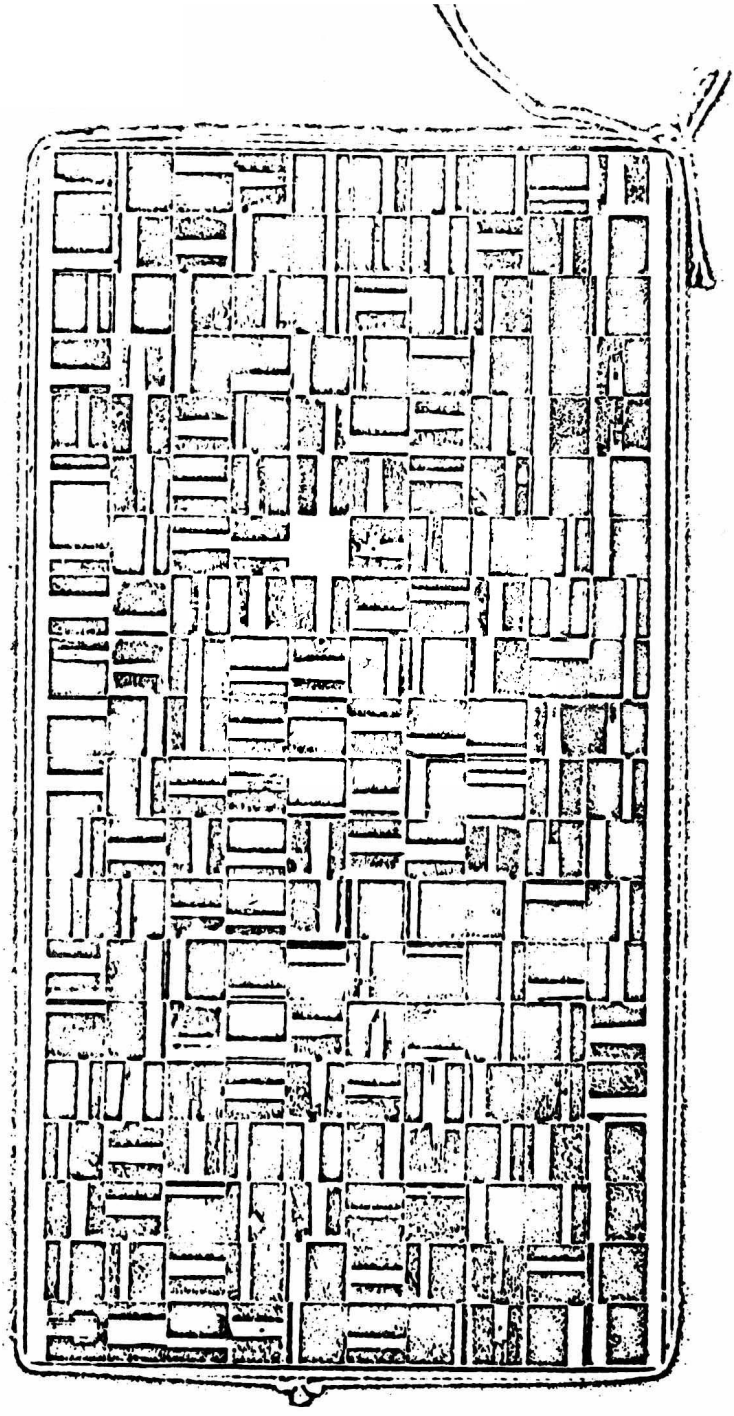
2

鮎川信夫著作集

鮎川信夫著作集 第二巻

詩論 I

発行一九七三年十一月一日　著者鮎川信夫　装幀粟津潔　発行者小田久郎　発行所株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三―一五　電話東京二六七―八一四一　振替東京八一二一　印刷宝印刷
製本岩佐製本　製函岡本紙器　用紙北越製紙　表紙日本クロス
© 1973, Nobuo Ayukawa



鮎川信夫著作集 2

思潮社

目

次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

暗い構図　四人に関するノート　10
詩人の出発　23
『荒地』について
Ⅰ『荒地』の立場　32
Ⅱ『荒地』について　33
Ⅲ『荒地』における主題　36
現代詩とは何か
Ⅰ詩人の条件　53
Ⅱ幻滅について　64
Ⅲ祖国なき精神　76
Ⅳなぜ詩を書くか　85
Ⅴ詩と伝統　98
Ⅵ詩への希望　110
現代詩の機能　128
われわれの心にとって詩とは何であるか　142

「反荒地派」について　185
現代と詩人　異数の世界へおりてゆく者　205
前衛の場について　219
詩人と民衆
Ⅰ権力への反抗　227
Ⅱ過渡期の態度　231
Ⅲ自己憐憫の限界　235
Ⅳ安定意識について　242
Ⅴ社会詩とタイハイ現象　249
Ⅵ可能性と個性　259
現代詩の難解性をめぐって
Ⅰ現代詩の難かしさと大衆　266
Ⅱ詩的想像力　268
比喩論二題
Ⅰ映画における詩的メタフォー　274

Ⅱ事実とメタフォー　280
四季派の呪い　287
浪曼主義と想像力　293
現代詩に求めるもの　304
近代詩における「近代」の運命　310
抒情の可能性――午後三時の対話　315
戦後詩の拠点
Ⅰ世代の交替について　322
Ⅱグループの問題　326
Ⅲ創造的エネルギーについて　329
現代詩との出合い　337
意味への意志　352

解説

鮎川信夫の根拠＝吉本隆明　362
〈境界〉について——鮎川信夫の詩の論理＝北川透　379
*
編集ノート＝三好豊一郎　390
掲載誌紙一覧　399

詩論 I

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

暗い構図——四人に関するノート

詩が人間の生活にとって今よりもずっと華やかな意義を持っていた時代のことを、我々はいまもう二度と返らないものとして思いかえしてみることが出来る。言葉の詩的意味の世界が、生活のもっとも高次の段階をやすやすと包含し、言葉の意味像のうちに人間の永遠の形姿を見ることが可能とされていた時代——、だからホメロスが彼の神々の間でいくら自由に振舞っても、彼の叙事詩の宇宙に於てどこまでも全能の人間たり得たのである。近代の貧しい詩人たちも、適当な余暇に恵まれてホメロスを読めば、叙事詩の冗漫さも詩の栄光として感ずることが出来るし、又その気になれば不滅の偶像として祭ることも出来る。シェークスピアにもブレークにもゲーテにも詩の栄光に輝く人間の楽園があった。それはどのような現代の解説者の細工によってもきずつけられない謂わば詩の黄金時代であった。そして詩の黄金時代は十九世紀に至るまで、ともかくも続いてきたのだと考えることは一向に差支えない。

ところが現代はユリシイズのパロディの時代である。このことを我々に教えてくれたのは、ジェームス・ジョイスという一個の作家ではなく「現代」そのものである。我々がユリシイズを手にしているということ、——それがホメロスのものであろうとジョイスのものであろうとお構いなく、そこにはもう一つの生きたパロディがある。それも今では常識となり、「現代」のクラシックなお手本となった。人間と自然との乖離によって、近代人の外観的矮小と内面的巨人の臨床的タイプが生れてから、自然と人間とのあいだに隙間がなかった時代に再び戻ることは出来ない。ヴァレリイが言ったように、我々は眼を後につけて前へ歩いてゆく。

詩の黄金時代にあっては、自然に対応する詩の観念のうちに一種の因果律が確立されていた。詩を書くから詩人で

あるのではなく、詩人だから詩を書くことが出来たのである。たとえば太陽や海も、自然と人間との間に介在する形式乃至は方法上の不安にぶつかることなく捉えられたし、季節も風土も詩人の感じ方、考え方の対象物として素朴な因果関係のうちで形象化されたのである。抒情詩とか叙事詩とかいった古い詩の分類法の時代から象徴詩以後の近代詩に至るまで、内容とか主義の如何を問わず、それが一つの態度、一つの主義に従う限り、あらゆる詩人は詩作過程に於て夫々一種の因果律に従って自己の詩を構成してきたのである。

それならば歴史は何故詩の黄金時代を見捨て去ったのであろうか。今日の我々は詩を書く前に詩を見出すのに骨を折らねばならない。人間の意図の巨大な錯綜である現代に於ける詩は、単純な一定の因果律によっては満足され得ない。我々を支える不変の尺度は何も存在しないのだ。詩に関する近代的思考が悟性の逆説的反語によって刺殺されぬときは、フォルマリスムの窮極的形態に於て現代詩は終熄する。しかし詩の進歩した思考も、一寸した逆説の手にかかるとすぐさま自然発生的観念論に陥没する。この両者の差違というものは通常考えられているよりも遙かにすくない。我々は詩の進歩の観念も信じないし、そうかといってその本質的不変性も、退化説も信じているわけではない。又我々は詩について相対立する諸観念のうちで八つ裂きになる危険を避けて、二者択一の判断に従うか、敏捷に立廻って利用し得るものを掠めとるかしても、現代に於ける言葉の最も特権的作用である詩の世界を意義づける確実な基準を見出すことは不可能なのである。作者と読者のどちらの側から言っても詩を見出すのに困難な時代にあって、我々はどのような希望を詩に対して抱き得るか。この問いに答えるためにも、我々の周囲には詩に無関心な者と詩に盲目な者は居ても、詩を真面目に疑う人間は皆無に等しいのである。過去の一切の権威から離れて、過去の一切の優れた詩人の妄想から離れて、自分の書いている詩というものを一遍ぐらい疑ってみても決して悪いことではない。

それは現在の我々にとって当然戦後の一般的な言葉への不信の感情というものと結びついてくる問題である。特に日本の現実を考える時に於てはそうでなければならぬ。「言葉に対する信用が強いられ、不信用がタブー化されたあ

と、プロパガンダの虚像が判明したならば、言葉そのもの迄、はなはだしい、不信用を蒙るのが常である。にも拘らず、プロパガンダの時代は、更に、過去の心理上の習慣を是が非でも利用せんとつとめる。不換紙幣の濫発が、更に不換紙幣の濫発をあおるように」とか、「民主主義日本のために氾濫している言葉は、通貨が、新らしい生産の再開を俟ってはじめて、落着くところに落着くように、今では、行方の知れない下落状態にある。むしろ、食うために隣人同志でやりとりされる、限られた二、三の言葉の外は、全く味も素気もない二、三の実利的な言葉の外は、単に、思惑と投機の道具である」という黒田三郎の意見のとおり、現在の日本の混沌とした言論の底には、まだ言葉への不信の感情が流れている。古い現実の秩序が崩壊し解体しても、まだ新らしい秩序が安定に到らない間は、言葉はどうしても思惑と投機の道具として使われるに過ぎない。こうした時代に詩人や文学者が、詩や文学そのものの存在理由から疑がってかかろうとしないのはむしろ不思議なくらいである。

ヨーロッパの文化的進展の過程に見られるような相対立する思想的抗争の歴史を、自国の文化のためにも、又実生活の上にも持たなかった明治以降の日本の歴史は、あらゆる面に於て思想の流産をくりかえし、過渡期の悲哀を舐めてきたのである。畢竟、独立しては何ものにも到達しなかった日本文化の、日本人の悲劇、——如何に覚醒した人間であっても、自己の生産の中途に於て、まるで死期にある人間のような殊更な反省を強いられざるを得なかったという只中で、我々はいま敗戦の現実に住みつこうと蹠いている。もし我々の努力が失敗に帰するならば、再び過去のその日暮しをくりかえすばかりである。だが我々の周囲には、決断力のない政治家、空想的な経済学者、無責任な思想家、垢じみた文学者があまりにも多すぎはしないだろうか。それにも不拘、我々は決断力のない、空想的で、無責任な、垢じみた事を、何か今の日本にふさわしい、どうにも致し方がないことだ、といったような一種のあきらめに似た気持を抱いて見守っているのではないだろうか。敗戦によって生き残った人間の得体の知れぬ表情には、どのような言葉も受けつけない、それでいて食うために隣人同志でやりとりされる、限られた二、三の実利的な言葉にはすぐ

とびかかって来そうな無感覚にして険悪なものがある。渡辺一夫は、「過激な夢」の中で、現在の日本の「文化に対する医すべからざる無関心と誤解、封建的なものに対する無反省、思想に対する冷淡」をとりあげ、今度の敗戦がもっと深刻な経過を辿り、アメリカ軍に捕えられた国民の新らしい政府と、山岳地帯に立籠もった同胞との間に悲惨な戦いが行なわれた方がむしろ望ましかったのではないか、少なくともこの時こそ日本歴史始めての思想的な戦いを経験するだろう、ということを述べているが、そうした過激な夢を抱きたくなるほど日本の現実は絶望的である。思想的責任を持たないということは如何に罪悪であるか、――それを徹底的に教えてくれたのが今次の大戦である。それならば思想とは一体何であろう。我々はその質問に答えて、一言で述べようとする独断的誘惑を先ず避けなければならぬ。沈着に、冷静に、しかも全速力で、我々は我々の存在の意味を究明し、我々を救助するものの中心にむかって急がねばならぬ。それは不可能を可能にする態のものではなく、我々が日本の現実の中に生きてゆくことによって、次第に「我々」と共に形を成してゆくものである。

現代に於て詩を書くことが如何に困難であるかについては多言を要しない。しかも我々が詩を書いているということ、――そこにはどうしても言葉に対するある信頼がなければならぬ。それは決して言葉への不信の感情に対する平衡感覚とか弁証法的結論とか、そんな一時的な理由に基づくものではない。

我々の世代の〈暗さ〉には、実生活上の影響ばかりではなく、さらに広範囲なさまざまな影響が認められる。単に文学的な側面から見てもカフカや実存主義などが関心の対象となったりしている背後には、我々の意識をそこに結びつけずにはおかない種々の原因が潜んでいる。一九三〇年代末期からの我々の〈暗さ〉は、我々の時代の、我々の現実の、我々の青春の行方の知れぬ不安と懐疑と絶望とが、自己証明の場に於てそうした形をとらざるを得なかったところにある。我々にとって明るい文学というものは存在しなかった。個々の人間の気質とか、個性とか考え方とかの差違は論外として、我々は自己を特徴づける世代の〈暗さ〉のうちに、我々の精神を抉る真実を視、自己の生の意味

ありげな投影を見たのであった。思想というよりも、単に意味ありげに見えるに過ぎぬものを模索していた我々は、若さによる貪欲な気持から、自己の〈暗さ〉という世界に、さまざまなものを運び込んだ。と同時に、我々の世界に流れ込んでくる新しい光によって、我々の〈暗さ〉は幾度も形を変えたのであった。今、我々は、我々が書いてきた詩によって、その変化を跡づけることが出来ると共に、現代の詩を書こうとする我々の構想と意図とを明らかにする端緒をも掴みうるのである。

一九三九年の『荒地』に発表された森川義信の「勾配」は、我々の暗い青春の最も記念的作品であると共に、今なお我々の脳裏になまなましく刻み込まれ、我々と共に生きている。彼は戦争の血と硝煙の匂いのなかで死んだが、「勾配」は現在に至るまで我々と共に成長することをやめない。そして私は彼が戦地へ赴く時に簡単な走書きで、長い手紙は書けないからトオマス・マンの「魔の山」の最後の頁を自分の手紙だと思ってもう一度読み返してくれ、と言ってきたことを忘れ得ない。「魔の山」の最後の頁には、――「御機嫌よう！　――生きているにしても倒れているにしても、お前の行手は暗い。お前が巻き込まれた血腥い乱舞はまだ何年も続くだろうが、私たちはお前が無事で帰ることは覚束ないのではないかと思っている。実を言うと、私たちは、それをどちらとも思わない。お前の単純さを複雑にしてくれた肉体と精神との冒険で、お前は肉体がある中は殆んど経験し得ないことを精神の世界で経験することが出来た。お前は『陣取り』によって、死と肉体の放縦との中から愛の夢がほのぼのと誕生する瞬間を経験した。全世界の死の乱舞の中からも、――雨混りの夕空を焦がしている陰惨なヒステリックな焔の中からも、いつか愛が誕生するであろうか」――これが謂わば、彼の最後の手紙であった。

現在の私には「勾配」の高さを鳥瞰する如何なる言葉も手段も持っていない。ただ私には、彼の最後の手紙の意味が「魔の山」との相関に於てよく解るだけである。「勾配」の格調の高さは、現代の詩には全く見られぬ処のものである。この高さを真に理解するためには、この詩の構成の緊密さと周到な用語の均斉をつらぬく一種の浪漫的表現の

美しさが、もはや、思考を煩わせなくなるまで読まねばならぬ。その上で我々はこの詩が言葉の有機的な、完璧な造型によって成立し、しかもそうした分析可能な世界に、最大限のメタフィジカルな効果を収めていることに驚くのである。すべて優れた詩というものは極めて論理的である。尤もこのことは誤解しようと思えば、いくらでも誤解できる。現在、我々が読まされるところの大部分の詩は、この誤解の上で鑄を削っているとしか私には思われぬ。論理的たらんことを標榜する主知派に於ても同断である。現代詩を毒している分派的精神が、お互に持っている正しさを誤解し合う結果、高い調和に到らんとする詩精神そのものを傷つけてしまうのである。北村太郎は「最後の賭博」に於て、「肥る苦しさ！」ということを言ったが、そんな贅沢なものはやはり日本には向かないのであろうか。それとも痩せた肉体には、痩せた精神がふさわしいとでも言うのであろうか。萩原朔太郎と西脇順三郎といった対照が、分派的精神の起源になりかねないような有様では、詩なんて痩せ細るばかりではないか。

「勾配」の示す高さは、我々の世代に共通する非望の精神を、我々の世代に共通する〈暗さ〉をつきぬけて、繊細にして柔軟な、しかも靭い言葉の世界に定着せしめたところにある。現実に対する絶望から、現実を否定したり逃避幻想の世界に落込んだりして、我々の精神を一層悪い溝渠のなかへ導くかわりに、彼は絶望のなかに生き、それを止揚することによって、我々の青春を覚醒せしめたところの倫理の世界を眼に見えるものとした。この詩の象徴的意味が、所謂象徴主義を超えている所以である。

詩は、通常の実用的な言葉の必然的な限定性から離れて、普通には所有し得ぬ意味とか心象とか韻律とかを持った一群の言葉の全的な聯関への欲望である。と同時に、か或いはむしろその故に、詩は自己と、自己をつつむ世界の秩序を明確にあらわし、自己の存在を全的に証明しようとする働きでなければならぬ。我々の世代の暗さを踏まえて、絶望を止揚した「勾配」に高さを与えたのは、同時に生に関する幻想の主体的な定着に成功している所以でもある。そしてこの成功、不成功は、彼が詩を書くことは正しいか、正しくないか、という人生論上の問題にまで発展させねば

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com